

彦輔が目を覚ますと既に日は傾き、たえも帰つていて夕食の準備をしている。権左は、わらじを作っているようだ。

夕食には、煮卵がでた。なんでも、たえが帰る時、村の長老からもらったらしい。いつものように無言である。

すると権左の箸が止まり飯椀を置いた。

「たえ」

「えっ？」

夕食で初めて会話を聞いた。それも権左が話しかけたのだ。

「たえ、お前は、この彦輔とその村へ行って話を付けてこい。何年かかっても仕上げてこい。いいな」

「は、はい」

たえは、鳩が豆鉄砲をくらったかのように目を丸くして答える。

権左は、言い終えるといつものように席を立った。丸めた背中、振り返った後ろ姿には寂しさを感じた。

たえと彦輔は目を合わせたが、たえはすぐに目を逸らせる。

ろうそく一本だけの明かりに彦輔の希望に満ちた横顔が浮かび上がる。

「お願いできますか」

「権左の命だ。やるしかない」

たえは、小さく肩を震わせている。

彦輔の視界から隠れるように下を向いた目から大粒の涙があふれ出ているのを見逃すことはできなかった。

たえは次の日、夜が明ける前から藤籠に旅のした

くを済ませていた。彦輔が権左に挨拶をしたいというとき、藤籠を担ぎながら「必要ない」と冷たくいう。仕方なく、感謝の言葉を筆にしたため、権左の眠る部屋の前に置いた。

「手紙を置いても無駄だ。父は字が読めぬ」

耐え難い言葉である。実の親子ではないといつても十八年間世話になった育ての父との関係は、これだけなのか、やはり師弟だけの間柄なのかも知らない。

二人は、二日二晩、野宿しながら新田村の入り口にたどり着いた。彦輔は牟禮村の我家に宿を構えてはどうかと問うたが、たえは新田村と上流の高木村の地形を見たいというので、仕方なく二つの村を

見て回った。

たえの地形を見る目は真剣そのものだ。彦輔が始めてみる遠眼鏡を複雑にしたような測量器を巧みに使い、絵図面に何やら書き込んでいる。ただ歩いていのかと思うと歩数で距離を測っているという。そうかと思うと今度は、山土を口に含み、なにやらぶつぶつ、つぶやいている。

高木村の神五郎池までくると、その動きは更に激しくなった。泥だらけになって測量を繰り返した。水路の中に腰までつかかり、水浴びをしているのかと思うと、深さを調べているらしい。

たえは、何枚も絵図面を書きあげ、大事そうに懐に仕舞い込むと目を輝かせた。

「さあ、お前のおやごも心配していることだろう。彦輔の家に案内してもらおうか」

すでに頭の中には仕上がり図面が描かれたのか、その眼には自信と熱意がみなぎっているようだ。ふつかんある。二日間歩き続け、たえの現地調査に丸一日付き合わされた彦輔は、遠くに見える屋島や五剣山の雄姿を眺める余裕はない。もうすぐ日が暮れる通いなれた道を歩いた。

家に着くと、父も母も弟も口を合わせたかのようになり、「嫁を連れて来たのか」とせまった。「そのようなお方ではありません」と口調を荒げて答えたが、たえは何も語らず、今日、仕上げた絵図面を眺めている。

丁寧に説明した。

ただの若者とは思えない言葉に、菊造の心は揺れ動く。そして、彦輔の口から決定的なことが告げられた。高屋の権左の娘で弟子のたえがこの地に滞在していることだ。

菊造は彦輔の熱意に心を動かされ、二日後に開かれる村の寄り合いに彦輔とたえを参加させることにした。

寄り合いは必ず農作業が終わる日暮れから始まる。長い土塀に囲まれた菊造の屋敷。村の長に相応しい大きな屋敷だ。

菊造は広大な土地を所有する地主で、多くの小作を抱える庄屋でもあった。そこに集まった八名の

父は、たえを客人として招き入れると、家の一番日当たりの良い部屋を与えて、暫くの宿とするよう伝えた。

次の日から本場の闘いが始まった。

まず手始めに、事の起りであるあの騒乱で出会った新田村の長、菊造の家を訪ねることにした。

菊造は彦輔との再会に困惑していた。まずこのような青年に水騒動が解決できるとは思わない。悪いが、社交辞令の挨拶を交わして帰ってもらうことを考えていた。

しかし、彦輔は水を持った村の苦惱、ため池を造るために必要なこと、高屋の権左に教わったことを

長老たちは、いずれも田畑を持つ地主である。その末席に彦輔とたえが座っていた。

広い座敷には行燈が四隅に置かれ、座る老人たちの表情がはつきり見て取れる。相も変わらず日照りが続いて、田植えができないことを口々に訴えている。やはり水不足が深刻なのだろう。

議論は上流の高木村にまで及ぶ。神五郎池のゆるを夜中に開けて、盗水しろなどと過激な意見も飛び交う。

一番奥の床の間を背にして座る菊造は、議論を黙って聞いていたが、たまらず口を開いた。

「では、ため池職人のたえ殿の意見を訊こうではないか」

長老たちは、ため池職人がここにいるというこ
とを聞かされていなかった。しかし、ため池職人を
連れてきたということは村にため池を造るつもりだ
ろうと想像がつく。

行き詰まった議論に少しの希望を感じさせる。そこ
にいた全ての長老が、たえの答えに注視した。

たえは、末席から菊造に向つて座りなおす。背筋
を伸ばし、毅然とした態度で地主たちに向かって発言
した。

「結論からいうと、この新田村にため池を造ること
はできない」

長老たちは、たえの言葉に大きく失望した。

彦輔と菊造も目を疑った。ため池さえできれば水
不足は解消できるのではなかったのか、新田村に

ため池を造るために、たえはここまでやって来たので
はないのか。

そして、たえは説明を続ける。

「ここにため池を造ったところで、流れ込むのは
上流の高木村にある神五郎池の溢れ水だけだ。い
くら、大きなため池でも水が流れて来ぬでは、結果
は同じだ」

そこに集まる者の中からはため息交じりの不満が
溢れだす。

菊造は、なんとかならぬものかと何度も訴えるが、
たえの答えは同じだった。

意気消沈する長老たちに向つて、たえが再び切
り出す。

うなだれた。

「そうでしょうか」

その中で一人、菊造の前に進み出たのは彦輔であ
つた。

「高木村の池を新田村の衆によつて工事すれば、
増えた水の量だけ下流に権利があり、新田村も
潤うのではないでしようか」

難しい問題だ。増えた分だけ下流の権利という
なら、高木村とすれば何も変わらない。大雨の問題
が増えるだけだ。到底、説得できる提案ではないだ
ろう。

紅潮したたえの顔が行燈の明かりに浮かびあが
る。

「大雨の対策を同時に行う。私は先日、高木村と
新田村の地形を見た。神五郎池の出口は一か所だけ

「新田村にため池を造ることはできぬが、一つだけ、
日照り病を凌ぐ方法が無いではない」

全ての者が飛び上がるほどの反応を見せた。隅に
置かれた行燈の一つが消えたことにも気づかないほ
どである。

「たえ殿、その方法とは」

皆の顔を見渡す。長老たちは息を飲む。彦輔も
たえの顔を見る。そしてその静かな口調が広い座敷

に響きわたった。

「高木村の神五郎池を広くすることだ」

ため息が漏れる。

「そんなこと、できる訳がないではないか、仮にでき
たとしても、下まで水は回って来ぬ」長老たちは、

だ。それを四か所に増やす。そして下流に向かう川幅を広げて、流れを良くすれば、いざという時には、堰堤が切れることを防げる」

筋の通った論理である。技術的にも反論できる者はいない。しかし、工事を実行するためには新田村の男衆が全て動員される。今は農繁期なのだ。米が作れなければ、年貢も納められない。工事が長引けばなおさらである。

農繁期ではない時期に工事を遅らせてはと皆が口々に訴えた。そのような泣き事にも、たえは明確に答える。

「この工事は、どの道一年以上かかるのだ。いつ始めても、その年の収穫は望めぬ。当然年貢も納め

ることは困難となるだろう」

そこにいた全員が凍りついた。それでは、自分の生活はおろか家族を養うこともできないではないか、僅かな蓄えも年貢で消えてしまう。水を確保したところで、今年の冬が越せなければ、何の意味も成さないのだ。落ち込む長老たちに向って、たえの意見が追い打ちをかける。

「さつき、菊造殿に訊いたが、新田村から工事に出来る人足は一日に二百人が限界らしいな、池が完成するまで二百人が毎日働いたとしても一年で完成することは不可能だ。遅ければ、来年の冬までかかるだろう。それを覚悟できないのであれば、日照り病が毎年やってくることを受け入れること

だ。この村の宿命として……」

彦輔がたまたま立ち上がる。

「たえさん、ちよつと待ってくれ、それでは新田村に死ねといっているようなものだ。作業は農閑期だけとして、数年に分けることはできないのかい」

それでも、たえは譲らない。その間に大雨が降れば工事は振り出し、何年かかっても完成しないという。父親譲りの頑固者だ。

(以上4月29日放送分)